

「気象と近代戦争との関係」

【第2回】気象と近代戦争との関係

航空気象群ホームページのコラム「気象の杜」へお越しいただきありがとうございます。ゴールデンウィークも終わり、梅雨の走りのような天気が続いていましたが、初夏を感じさせる日も続いており、「気象の杜」の仲間たちも夏に向けて気分を上げて乗り切ろうと日々頑張っています。

さて、今回は気象と近代戦争との関係について紹介したいと思います。

まず日本では、1875年（明治8年）6月1日に日本で初めての気象台が開設され、気象観測が開始されました。その後、1884年（明治17年）6月1日、東京気象台（現在の気象庁）が初めて全国の天気を報じました（6月1日は「気象記念日」となっています）。

では、近代における気象予報の始まりはいつなのでしょうか。それを知る一例として、欧州における戦争の歴史と気象との関係に注目してみましょう。

1815年6月、ベルギーの首都ブリュッセル南西約20kmにあるワーテルローという街を舞台にイギリスのウェリントン将軍率いる英、プロイセンからなる連合軍とナポレオン率いるフランス軍との間で「ワーテルローの戦い」が行われました。ワーテルローの戦いでは、フランス軍は地形的に不利であったことに加え、大雨によりぬかるんだ地面のため砲兵の進出がうまくいかず、結果として歴史的な敗戦を迎えました。この19世紀初頭から中期にかけて、米国、ロシア、オランダやベルギーなどで気象観測測器の整備が進められ、気象観測網の整備といった、気象観測における国際協力の重要性が認識され始めました。ワーテルローの戦いでは、まだ気象を戦いに生かすことはできませんでしたが、当時オランダの気象学者であったボイス・バロットは、気象に関する観測的事実から「人間が風を背にして立った時、左手側に低気圧の中心が存在する」という法則を発見しています（気象業界では「ボイス・バロットの法則」として知られています）。

そして、1854年6月のクリミア戦争では、英仏の戦艦が黒海にて暴風により沈没し、クリミア半島にいた地上軍を含め、連合軍は大損害を被りました。これを契機にフランスでは原因を調査し、その対策として地上で観測した嵐の移動について、当時発達した電報を使って短時間に知ることができれば嵐の到達を事前に予測できると結論付けました。これにより以降の国際的な気象観測網の構築に繋がることとなりました。

20世紀に入り科学技術も更なる発展を遂げる中、第1次世界大戦時、世界的に「ネコ祭り」で有名なベルギーのイーペルにおいて、ドイツ軍が世界で初めて化学兵器であるマスタード・ガス（「イーペル」という地名にちなんで「イペリット」と名付けられました。）を使用しました。その使用の際には、ガスの効果的な使用のため、塹壕への風向きなど気象条件を考慮しました。また、第2次世界大戦時のノルマンディー上陸作戦における作戦開始日（6月6日：D-Day）の決定では、当時の気象予報官（英国軍大佐）がアイゼンハワー将軍に対し、上層風の変化を綿密に解析した結果、6月5日には低気圧に伴う暴風雨を予想すると意見具申し、D-Dayを6日へ1日延長する決心に結び付いたのです。

このように気象予報は、その発展の歴史とともに、戦争の中でも重要な意思決定の場面で関わっていることがわかりますね。

【参考文献】

- 1 堤 之智 (2018) 『気象学と気象予報の発達史』 丸善出版
- 2 ワーテルローの戦い研究会 (Le Comite de WATERLOO) 『1815年ワーテルローの戦い古戦場を巡る』
公式ガイド Welligton Museum
- 3 Royal Meteorological Society, “How a weather forecast made history - the D-Day Landings, Royal
Meteorological Society HP, 03 June 2019,
<https://www.rmets.org/resource/how-weather-forecast-made-history-d-day-landings>, (参照 2022-05-08)